

# 剣道を通して学ぶ国際理解教育の実践

前在チリ共和国日本国大使館付属サンチャゴ日本人学校教諭  
東京都国分寺市立第二小学校教諭 横谷 秀幸

キーワード：国際理解教育、日本文化、チリ、剣道

## 1. はじめに

私は小さな頃から剣道を習っており、大人になってからも自分自身が選手として活動するだけでなく、社会教育の中で子どもたちの指導をしていた。また、大学では日本美術史を専攻し、寺社仏閣についての研究をしてきた。自身の経験を教育に生かしたいとは考えていたが、日々の教育の中で生かす場面はほとんどなかった。

教師としての経験を重ねる中で、海外で生活する児童生徒の中には、日本文化に触れたくてもその環境がなく、歯がゆい思いをしている者もいるのではないかと思うようになった。そこで、そのような児童生徒に日本文化に触れる機会を作ってあげたい、そんな思いを抱くようになり、在外教育施設への派遣を志した。

ここでは、チリにおける自身の活動と成果について紹介したい。

## 2. チリの首都 サンティアゴと、国内唯一の日本人学校、サンチャゴ日本人学校

### (1) 首都サンティアゴについて

南米大陸の東岸に位置するチリ共和国。南北の長さが世界一を誇り、様々な気候帯が存在する国であるが、首都サンティアゴはその中心の盆地に位置している。全国の人口が約1900万人いるのに対し、その約3分の1にあたる約670万人が首都サンティアゴに生活をしている。また、南米各国には日系人と呼ばれる現地に帰化した日本人が多く住んでいるが、チリは例外であり、海外駐在者を合わせても1700人程度しか日本人がいない。そのため、日本人のコミュニティも小さく、近隣諸国に比べ、日本文化に触れることは難しいといっても過言でない。

### (2) サンチャゴ日本人学校について

チリの日本人コミュニティが小さいこともあり、サンチャゴ日本人学校は小規模校である。令和2年3月末現在、全校児童生徒数は小学校29名、中学校7名の計36名であった。学校の特色から毎年チリ文化と日本文化に関する授業や行事を多く取り入れている。しかし、前述の通り、日本文化に関しては外部人材を取り入れて文化を学ぶことが難しいこともあった。

## 3. チリの剣道事情

### (1) チリ人のもつ日本像とチリの剣道家

チリから見ると日本はアジアの中の一国に過ぎず、よく「中国の一部である」という誤認識をしているチリ人を見かけた。しかし、大部分のチリ人は以下のようなイメージを持っている。

- ①「アニメ」と「ゲーム」といったサブカルチャーの先進国である。
- ②TSUNAMI（津波）の多い国である。（チリも地震大国であり、津波の被害を何度も受けている）
- ③忍者がいる。
- ④（他のアジアの国々と比べて）温厚で、まじめ。チリに富をもたらしてくれる。

（アジアの一部の国はチリ国内でビジネスを始め、自国の富を奪うため煙たがれているようである。）

そのような中で一部のチリ人がアニメなどから剣道や弓道、空手といった日本武道の存在を知り、習い始めるといったことが多いようであった。

しかし、日本人よりも武道に接する機会が少ないためか、武道を始めたチリ人たちは非常に熱心であり、ネット等を通じて多くの情報を得ている。また、そのことをきっかけに日本文化や日本の思想にも強い関心を抱いているチリ人剣道家が多かった。そのため、「三島（由紀夫）はなぜ切腹したのか」「武士の魂はいつから日本に根付いたのか」など、普通の日本人でも返答に困るような深い疑問をぶつけられることも多々あった。

## (2) チリ剣道連盟

チリにも剣道連盟は存在し、世界剣道連盟にも正式に登録されている。そのため、剣道の世界大会にはチリ代表の選手たちも出場している。

前述の通りチリ人剣道家たちは、日本の剣道、そしてその精神を心から愛している者が多い。しかし、一部の国では武道としての剣道ではなく、スポーツとしての剣道を目指す風潮がみられている。チリの剣道家たちはそのことを良く思っておらず、ネット等から得られる疑わしい知識や技能ではなく、日本に行って本当の剣道を学びたい、という者が多い。そこでチリ剣道連盟では、毎年連盟の費用で千葉県にある国際武道大学に数名のチリ人剣士を剣道留学させるという取り組みをしている（令和元年度から中止）。そうすることで日本の正しい剣道を学んだ剣士を増やし、指導者を増やしていこうという狙いがある。

また、剣道連盟公認の道場も多く、サンティアゴ市内のみでも6~7個の道場がある。また、年に1度全国大会もあり、多くの選手が出場している。

## 4. 日本人学校における剣道の授業

### (1) 派遣当初の剣道の授業について

中学校の学習指導要領では武道が必修となっており、柔道、剣道をはじめとした武道の授業をしなければならない。そこでサンチャゴ日本人学校では毎年竹刀を使い、「木刀による剣道基本技稽古法」の発表をするために練習をする、という形で授業を計画、実施してきた。剣道の段を有する私は、派遣初年度からそこに携わり、指導をしてきたが、そこにいくつかの課題を感じていた。以下にその問題点を示す。

### (2) 日本人学校における剣道の授業実施に伴う問題点について

#### ①施設の問題

サンチャゴ日本人学校には体育館がない。聞いたところによるとチリの気候は非常に乾燥しており、板張りの体育館では、床板が乾燥によりすぐに傷んでしまうということだった。そのため、管理が難しく、現地の学校でも板張りの体育館を持っている学校は滅多にないとのことだった。そのため、日本人学校にはコンクリートの上に絨毯を敷いた講堂のみあり、剣道の授業もそこで行なっていた。

剣道の基本動作として「擦り足」という動作がある。これは素足で地面に立ち、足裏を床から浮かすことなく、擦るようにして進む動作である。しかし、絨毯の上で擦り足をすると摩擦が強く、足の指を巻き込んでけがをしてしまう可能性がある。また、本来剣道の動きの中で「踏み込み」という床を強く踏む動作があるが、絨毯の下がコンクリートであるため、踏み込みができず、剣道本来の足さばきができないという現状があった。

#### ②用具の問題

チリという国は、植物由来の製品の持ち込みに対する規制が非常に厳しい。自身のプライベートの話になるが、リュックサックに付けていた木製キーホルダーさえ入国の際に没収されてしまったくらいである。そのため、剣道の練習に必要な不可欠な竹刀の持ち込みが難しいのである。サンチャゴ日本人学校にも10本程度の竹刀がある。しかしこれは十数年も前、おそらく規制が緩い時代に持ち込まれた物である可能性が高く、このチリの国の乾燥した空気のせいもあり、保存状態が非常に悪い物ばかりであった。また、防具の持ち込みも難しい。地球の裏にあるチリであるため、輸送費は非常に高額であり、もし個人で持ち込むにしてもそ

の大きさ、重さから、よくても1家族1セットしか持ち込めないであろう。そのため、チリの国で剣道をするには、用具をそろえる難しさがネックの一つになっている。

### ③指導者の問題

小規模校であるサンチャゴ日本人学校には、中学体育の免許を持っている教師が派遣されることが少ない。また、剣道や柔道といった武道を教えられるレベルの人はもとより、その経験者が派遣されることも滅多にないことである。

また、私が派遣される前までのサンチャゴ日本人学校では、JICA（国際協力機構）のシニアボランティアの方がその指導をしてくださっていた。しかし、チリの経済発展に伴い、JICAのボランティア派遣も中止になることが分かったため、シニアボランティアを指導者に招くという選択肢も消えた。

保護者や企業の駐在員の中にも経験者はいると思われる。しかし、平日昼間の授業で指導するにはそれなりの手続きが必要になる上、今後継続していくことを考えると、その方が帰国してしまったら後任者を探す手間が再び発生してしまうのである。

以上のことを考えると、日系人の中から指導者を探すか、チリ人の中から、剣道をしていて、且つ日本語の堪能な方を探すしか方法がないことになる。

### (3) 今後の剣道の授業の実施について

以上のような3つの課題を改善し、毎年確実に剣道の授業が実施できるようにするために、以下のような達成目標を作り、残り2年間の赴任期間の授業づくりを行った。

#### ①床の問題の解消

床の絨毯では滑りが悪く、またコンクリートでは踏み込むことができず、正しい足さばきができないため、講堂全面に敷くことができるだけのフロアマットを用意することを目指した。しかし、サンチャゴ日本人学校の年間予算を考えると年に数回しか行わない剣道のために多くの予算を割くことができない。そこで、保護者や日本人会の方々に声をかけ、不要になったフロアマットを寄贈してもらった。令和元年末現在、講堂の半分程度の面積のフロアマットが集まっている。

#### ②用具の問題

防具は非常に高価であり、フロアマット同様予算で購入することは難しい。また、多くの防具や竹刀を集めたとしてもその保管場所が無く、また1年間倉庫に放置しておくとも傷みも激しい。そのため、令和元年度に立ち上がった日本人対象の剣道クラブとタイアップすることにした。このクラブでは占有の倉庫などは所持していないのだが日本で不要になった防具を集め、会員が持ち回りで（レンタルを兼ねて）防具の管理をしている。また、このクラブには日本人学校の児童生徒も多く所属している。なお、竹刀に関しては消耗品であるため個人で購入している。そこで、授業期間のみこのクラブで保有している防具をレンタルできるようにクラブの責任者に依頼を出し、承認を受けた。また、竹刀に関しても授業期間中はクラブに所属する児童生徒が自分で竹刀を持ってくることで、学校で管理する竹刀の量を大幅に減らすことができそうである。

#### ③指導者の確保

自身の派遣初年度から剣道連盟の稽古やイベントに顔を出し、平日昼間に実施される日本人学校の剣道の授業に指導者として協力してくれる人材を探してきた。

その結果、チリ剣道連盟の会長であり、国際武道大学へ留学経験があるだけでなく、毎年剣道の修行で日本に足を運んでいるニコラス・ディアス先生と出会った。ニコラス先生は日本語が堪能であり、全日本剣道連盟からも六段の認定、そして錬士という称号を受けている。また、普段の仕事も剣道の道場の運営をしており、平日昼間であれば活動できるとのことで、これ以上ない指導者を探し出すことができた。また、平成30年度、令和元年度と2年にわたりニコラス先生やチリ代表選手を授業に招き、実際にTTでの授業を実施

してきた。それを受け令和2年度からはニコラス先生が中心となり、毎年9月に授業を実施する予定である。

## 5. 剣道の授業で期待される教育的効果

### (1) 正しい剣道技能の習得

日本の剣道の体育の授業の中でも、有段者から指導を受けられる機会は滅多にないと思われる。そんな中、遠く離れたチリにおいて有段者から指導を受けることができるため、正しい技能の習得が期待できる。

### (2) 日本文化に触れる

海外生活では、なかなか日本文化に触れることができない。しかし、日本から取り寄せた用具と日本で学んだ正しい指導法を身に付けた講師がいることで、古くからの日本の伝統文化に触れることができる。

### (3) 日本の精神に触れる

学習指導要領では武道指導の教育的効果の1つとして、相手を尊重するなどの人間形成に必要な物事の考え方を挙げている。また、全日本剣道連盟も剣道の理念を「剣の理法の修練による人間形成の道である」としており、チリの剣道家たちもその理念を大切にしている。昨年度の打ち合わせの中でも指導の中で日本の精神を指導してほしいという依頼をしている。そのため、過去に実施した授業の中でもニコラス先生が「礼に始まり礼に終わる」という言葉を使い、礼の大切さを指導する場面も見受けられた。

今後も毎年ニコラス先生から日本の精神に関する指導がされるはずである。

### (4) 国際理解教育（海外で愛される日本の姿、目標に向かって進む生き方、日本文化への関心の高まり）

チリで生まれ育ちながらも日本の文化について学んでいるチリの剣道家たちの言葉を聞くことで、海外の人々から日本がどのように見られているのかを知ることができる。また、日本文化である剣道に没頭し、多くのことを調べ、学んでいる彼らの生き方に触れることで、日本文化の魅力を再確認できるだけでなく、日本に比べ剣道について学ぶ機会を得るのが難しいチリの国で、留学をしたり、言語の壁を乗り越えるために日本語を学んだりする姿から、夢や目標に向かって努力する生き方を学ぶこともできる。

そして、そんな彼らから、自分たちが育った日本についてあまりにも日本のことを知らな過ぎる現実を目の当たりにし、もっと日本について学びたいとなる児童生徒が出てくることも期待できる。

## 6. おわりに

派遣された3年間の中で、児童生徒が日本文化に触れる機会を1つでも作ってあげたいという思いで始めた剣道の授業の充実・持続化に向けての取り組みであったが、一番大きな収穫を得たのは紛れもなく私本人であったことを自覚している。

多くのチリ人と接し、話す中で、いかに自分が日本のことを知った気になっていたか、どれだけ自分が日本のことを知らなかったかに気付かされた。また、「日本文化の奥に隠されている日本の精神」という部分をチリの人たちも理解し、その本質を愛してくれていることを知り、自分の愛する日本文化の素晴らしさを再確認することができた。

今回の経験を自分だけのものにせず、日本で指導する児童たちの成長につなげられるようにすることが私の使命である。この3年間の経験を活かし、少しでも多くの児童生徒たちを成長させていきたい。